

たんぽぽ



vol. 65

平成21年1月発行

発行者 放送大学

富山学習センター

責任者 所長 渡邊 裕司

永劫回帰

客員教授 盛永 審一郎

高校2年の2月上旬に本屋から入荷の知らせが入った。わくわくしながらその本を手にとったことを今でも覚えている。中央公論社の「世界の名著」。第1回配本は、46巻、F・ニーチェの『ツアトラウストラ』、手塚富雄訳だった。そこにでてきた4文字が私の人生を決めた。——「永劫回帰」。ニヒリズムのもっとも極端な形式。

一度、ニーチェがこの思想の着想を得た、「海拔6000フィート、人間的なもののすべてを超えて」という場所を訪れたいと思っていた。しかしそこはきっと奥深い秘境だろうと想像し、なかなか足が向かなかった。自分の体に衰えを感じ、もうこれで最後かもしれないと思い、学会最終日に、思いたって夜行寝台に飛び乗った。朝、チューリッヒに到着。そこで乗り換え。列車はライン川の源流に向かって走り、やがてサンモリッツに着いた。週末ということもあって、大勢の観光客で満ちあふれていた。シルスマーリアはここからバスで40分ほど。人跡未踏の地かと思っていたら、バスは、1時間に1本あり、しかも満員だった。半分安堵し、半分がっかりしながら宿へ向かった。シルヴァプラナーナ湖とシルス湖の二つの湖があり、山々に囲まれた高度1800メートルの地点だった。たまたま予約した宿は、ニーチェが1881年から88年にかけて夏の間だけ住んでいて、現在は午後のみ開館する記念館になっている家の向かいにあった。

記念館に展示されていた資料の中に、ニーチェが永劫回帰の着想を得たピラミッド岩の白黒の写真を見つけた。この写真を頼りにこの岩を捜した。しかし見つけることはできず、諦めて宿に戻った。翌朝、いたたまれず自転車を借りて岩探しに出かけた。まだ暗かった。おまけに、どんよりと雲が覆い、靄もでていた。シルヴァプラナーナ湖の反対側の方向を目指した。道は、途中から、湖を離れ、山にはいるし、人っ子一人いらず、何度か引き返そうかと思った。それでも、これで引き返したのではと思い、ペダルをこぎ続けた。再び、湖面に沿った道となり、ついにピラミッド型の岩を発見。写真と見比べて、確かにこの岩だと確認した。しかし、凡庸な私にはニーチェのような高揚感はなかった。見ると、黒リスが走りでてきた。「そうかこれが人生か。よしもう一度。」

